

学習指導要領を読み解く、 3つのキーワード



田村 学

◆主体的・対話的で深い学び

「主体的・対話的で深い学び」とは、資質・能力の育成に向けて、授業中に実現したい生徒の学びの姿のことである。その姿を実現するためには、生徒が学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることができるよう、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。また、そのためのカリキュラムを意図的にデザインし、組織が一体となって取り組むカリキュラム・マネジメントが欠かせない。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、以下の3つの視点に立った授業改善を行うことが考えられる。

- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ②生徒同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう

「深い学び」が実現できているか。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことでも、教員の意図を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、生徒に求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

加えて、カリキュラムをデザインすることも重要である。各教科・科目等における知識の活用・発揮のみならず、各教科・科目等を横断した活用・発揮の実現が期待されている。そのためにも、各教科・科目等を俯瞰して見渡すことのできる単元配列表などを作成し、具体的な計画を立案、実施していくことが求められている。

◆知識及び技能

各教科・科目等において習得する知識や技能については、個別の事実や手続きのみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ身体と一体となって、社会の中で生きて働くことが期待されている。資質・能力として各教科・科目等で育成を目指す「知識及び技能」については、具体的な事実に関する知識、手順の実行に関する個別的な手続きに関する知識を獲得することが考えられる。加えて、複数の事実に関する知識や手続きに関する知識が、相互に関連付けられ、統合されることによって生成される構造的で抽象化された状態の知識として獲得されることが期待されており、概念化された知識として重視されている。

知識については、事実に関する知識を関連付け

て構造化し、統合された概念として形成されることが求められる。例えば、「何年にこうした出来事が起きた」という歴史上の事実的な知識は、「その出来事はなぜ起こったのか」や「その出来事がどのような影響を及ぼしたのか」を追究する学習の過程を通じて、当時の社会や現代に持つ意味などを含め、知識相互がつながり関連付けられながら習得されていく。それは、各教科・科目等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念の習得につながるものである。基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことが重要となる。

技能についても、手順に関する知識を関連付けて構造化し、特定の場面や状況だけではなく日常の様々な場面や状況で使用可能な技能として身に付けることが求められている。したがって、期待する生徒の姿としては、それぞれの技能がいつでも、滑らかに、安定して、素早く行われる姿として現れるものと考えることができる。獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて使用できる技能として習熟・熟達していくことが重要である。

◆思考力、判断力、表現力等

将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける必要がある。資質・能力として各教科・科目等で育成を目指す「思考力、判断力、表現力等」については、身に付けた「知識及び技能」の中から、課題の解決に必要なものを選択し、状況に応じて適用したり、複数の「知識及び技能」を組み合わせたりして、適切に活用できるようにしていくことと考えることができる。

このように、「思考力、判断力、表現力等」は、「知識及び技能」とは別に存在していたり、「知識

及び技能」を抜きにして育成したりできるものではない。いかなる課題や状況に対しても、「知識及び技能」が自由自在に活用できるものとなるよう育成することこそが「思考力、判断力、表現力等」の具体と考えることができる。

そのためにも、各教科・科目等において「知識及び技能」を活用・発揮する学習過程が重要になる。「思考力、判断力、表現力等」を育成する学習過程としては、①物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく、②精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく、③思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく、などが考えられる。

また、各教科・科目等を横断して「知識及び技能」を活用・発揮することも重要である。したがって、学習指導はもちろん、カリキュラムのデザインにおいても他教科・科目等と総合的な探究の時間等との関連を図り、意図的・計画的・組織的に学習活動を展開していくことが重要になる。

こうして身に付いた「知識及び技能」は、学んだ当初とは異なる状況においても自在に活用できるものとして身に付いていくことが期待されている。このことが、「知識及び技能」が駆動する状態になり、「思考力、判断力、表現力等」として、確かに育成されている姿と考えることができる。

◆参考文献

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日、中央教育審議会）
「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」（平成31年3月28日、文部科学省）

（たむら まなぶ・國學院大學教授）